

# ハート・オブ・ゴールド



vol. 7

2002年6月6日発行

発行/編集 ハート・オブ・ゴールド事務局  
本部 〒701-1213 岡山市西辛川872-2  
T&F 086-284-9700  
メール:hearts05@hofg.org

URL: <http://www.hofg.org/>



## 国連人口基金 親善大使を受けて (UNFPA)



カンボジア家族計画協力協会のビアエジュケーターと交流

ハート・オブ・ゴールド会員の皆様！  
そろそろ“梅雨”かなー？と思わせる今日この頃お元気でしょうか？

日ごろは各方面において、いろいろな形でHOGを支えていただきありがとうございます。

さて、1月23日に国連人口基金の親善大使に任命されました。これもハート・オブ・ゴールドの活動がある意味評価されたものと思います。2月12日～18日にかけてカンボジアを訪問し、エイズに苦しむ人々や、エイズ撲滅の活動に参加している現地の方々を訪問しました。これまでとは違った新しい困難と人々に出あいました。

活動は主にカンボジアの若者へのエイズストップキャンペーン事業です。ハート・オブ・ゴールドの活動ともネットワークを組んでカンボジアと日本の青少年に、情報提供・問題解決のきっかけ作りの場になるよう努力していきたいと思っています。

これからも皆様のご協力をお願いいたします。

代表理事 有森 裕子

-----  
\*詳細はステップキャンペーンホームページをご覧ください。  
URL:[www.step-campaign.com](http://www.step-campaign.com)

盛大に

## アンコールワット国際ハーフマラソン 青少年レクリエーション大会

マラソン・青少年レク大会委員長 有森 裕子

12月1日、2日にカンボジアシェムリアップにて開催した「青少年レクリエーション大会」と「第6回アンコールワット国際ハーフマラソン」に、格別のご協力を頂き厚くお礼申し上げます。

おかげさまで、両大会とも盛大に事故もなく執り行われましたことを報告いたします。マラソン大会は25カ国1地域から総勢1,465名が参加し、運営に関しては、ほとんどがカンボジアのスタッフによってなされ、すっかりカンボジアの国際行事となった感があります。また20名のカンボジア女性もはじめてハーフマラソンに参加しましたし、車椅子、義足の障害者の方々も年々増加しております。

今年は国際マラソンの前日に、青少年レクリエーション大会を開催し、青少年400名を対象にバレー、サッカー、バスケット、レクリエーションを元オリンピック選手やプロサッカー選手、大学生ボランティア20名、一般ボランティア20名、が現地に入り、現地参加ボランティア20名とともに活動をしました。学生は準備の段階から、この活動に主体的にかかわり、ボール集めから、しおり作成やこのイベントのための歌を作詞作曲するなど、驚くほどのパワーでこの大会にかかわりました。

カンボジアの青少年教育スポーツ局と協力して、6月から準備を進めてまいりましたが、こんなに子ども達が集まっているいろいろなスポーツ大会が開催されたのはポルポト政権後初めての事だそうで、現地の方々と感謝と感動を分かち合いました。指導者がいない状況の中、サッカーやバーボールは多くの庶民の中に浸透し、技術も驚くほど高いものがありました。

マラソンから多くのスポーツに広がり、年1回のイベントから子ども達の日々のスポーツ教育に広がってきたことに、ハート・オブ・ゴールドの活動が根付き、花を咲かせ始めたように感じました。この先もカンボジアの子ども達の心と体の健康な発達に、参加させていただきたいと強い思いを抱いて帰国致しました。

最後になりましたが、このマラソン大会に多大なご協力を頂いている三井(株)、明治乳業、かねふくを始め、青少年レクリエーション大会に支援いただいたSSF、義手義足支援協力のコニシ(株)を始めとする日本国内のチャリティスポーツイベントに参加された多くの皆様方に厚く感謝すると共に、今後も引き続きぜひご協力とご支援をお願いいたします。

\* 義手・義足支援先 カンボジアトラストとハンディキャップインターナショナルから

ハート・オブ・ゴールドを通じて、多くの方々に我々の活動を知って戴けることを大変嬉しく思います。そして皆様からの暖かい支援金に感謝申し上げます。皆様のご厚意をカンボジアの地雷被災者のために有意義に活用することをお約束いたします。

東ティモール

## スポーツによる国づくり

### 独立記念フェスティバルに専門家を派遣

苦しい歴史からようやく独立を勝ち取った東ティモールは、独立を記念し、首都ディリで4月30日から5月20日まで「独立記念スポーツ大会」が開催され、マラソン、サッカーなど約20種目の大会が盛大に行われた。シドニーオリンピックのマラソンに、東ティモール代表として出場したアギータ・アマラルさんからスポーツ大会の支援を要請された経過もあり、ハート・オブ・ゴールドは、国連東ティモール暫定行政機構(UNTAET)と国際協力事業団(JICA)と連携して、独立記念スポーツ大会を支援するため開発途上国で活動経験のある専門家が、下記の日程で派遣されました。

#### 派遣者

4月16日～7月15日 山口 拓(JICA/NGO技術者派遣制度より)  
青年海外協力隊OB  
5月6日～5月26日 西川公明(スポーツ指導専門家)  
元神戸市陸上競技協会理事長  
5月11日～5月21日 岡田千あき(Program Officer)

青年海外協力隊OG大阪外大助手

特に山口拓氏(28歳)は、大会副統括官として3ヶ月間活動し、大会競技委員のアフランオ・ジヤビエル・アマラルさんは「拓という心強い仲間と機材を送ってくれた日本に心から感謝している」とのコメントを寄せている。

#### East Timor Independence Festival of Sports 報告

JICA/NGO技術者派遣スポーツ専門家：山口 拓

2002年5月20日に独立を宣言予定の東ティモールにおいて、独立式典関連行事の5つの催しの一つであり、青少年が絶対数を占めるこの新しい国の今後の活力を高め、又、平和をアピールする「スポーツの祭典」は、4月30日に開かれたオープニングセレモニーを皮切りに、その後開催されたサッカーの全国大会決勝へと続き、人々にスタートした。オープニングセレモニーには、グスマン大統領、ラモスホルタ外務大臣(ノーベル平和賞受賞者)、東ティモール国軍司令官、UNTAET代表デメロ氏、外務省渋田氏、JICA所長、閉会式には、IOC副会長ケビン・ゴスバーが駆けつけるなど多くの出席者と報道陣、子どもたちで大変な賑わいとなった。

マラソン大会は5K・10Kロードレース、ハーフマラソンの3競技が開催され、5月11日に東ティモール人を始めとして、UN関係者、自衛隊を含む各国のPKF等、844名が参加し、65名の現地人ボランティアが運営に携わった。初めて自ら大会を運営する現地人スタッフ達は、現在厳しい生活を強いられているが、長年の夢であった独立を成し遂げるに当たり、無給での運営活動で、昼食時間を削って大会準備から当日までばらしい働きでこの大会を成し遂げた。

大会が終わった町は、ハート・オブ・ゴールドの黄色いTシャツで賑わいを見せています。やっとの事で独立式典関連スポーツ行事の全行程を終了し、落ち着く暇もなく今後は、体育科教育とスポーツ協会の構造再編成に対するサポートに入り、活動を展開しています。NGOという事で草の根活動的な活動を展開し出来る限り、現地の方々がイニシアチブを持てる様な活動にしようと心がけています。驚く事に、この国の開発計画の中に、体育・スポーツを通じた開発が掲げられており、これによる青少年の人材育成、人づくり・国づくり、教師・指導者の育成など、青少年が人口の大半を占める、この国の引き上げに上手にスポーツが使用される様です。これらに関し、全力を注ぎたいと考えております。

## 日本語教室報告

日本語教師 桧尾 瞳

2000年9月よりシェムリアップ州のスナーダイ・クマ工孤児院にて1998年より開校されていた日本語教室をひきつぐ形でカンボジアで活動。3月までの任期を終え地元の学校からの強い要望を受け、6月より公立チエイ小学校で、10月よりワットボーカ学校にて開設。各小学校で月曜から金曜まで、1日1時間1クラスづつを開校。

子ども達は、日本語ができることで、就職の機会が飛躍的に増大することを知り、熱心に受講し日本語を習得している。聞く・話す・読む・書くの4技能の学習もその課ごとの到達目標に対して、約90パーセントの到達率である。日本語教室の子供達の家庭訪問を行った際、「先生、有難うございます。先生が来てくれなかつたら一生うちの子は日本語など勉強できなかつたでしょう。本当に有難う。日本語をしっかり勉強して、この子が家を助けてくれるようになつたらどんなにうれしいでしょう。希望が出てきました。感謝します。たくさん子供がいますが貧しくても頑張ってこの子達を育てていきます。いい事があるような気がします。」と保護者からこのような感謝の言葉が多く聞かされ、活動の手ごたえを感じると共に継続の責任を感じている。

また、日本語教育と合わせて、日本のいくつかの学校と子供同士の手紙や絵、写真の交換、日本からの文房具の支援なども行われている。カンボジアの子供達にとっては世界が広がつて励みになっているし、日本の子どもたちにとっては、開発途上国でありポルポト時代の悲惨な歴史を克服しようとしているカンボジアの子どもたちの現実を知り、そこで一生懸命いきている同世代の子どもたちとの具体的な国際協力、国際交流を通じて、平和や貧困、連帯などの地球的な問題を考え、解決にむけて参加する喜びと意欲を育んでいることは日本語教室の大きな成果といえる。

#### ◆スタディツアーレポート

瞳が輝いていた  
カンボジアの子どもたち

ノートルダム清心女子大学  
人間生活学部4年 岩本 尚子



今年で3回目を迎えたスタディツアーレポートの今年のテーマは「ふれあい」。去年のツアーレポートでは、現地のNGOで働いている人々の話を多く聴きましたが、今年は子供たちとのたくさんの出会いに沸きました。ステミンチャイで出会った子どもは、ごみの山からお金になるものを拾って生活しています。そこで、子どもたちに識字教育や衛生教育をしている団体・JLMMの活動が強烈に残っています。実際にごみ山近くまで行きましたが、我慢ができない臭いの中、今日の糧を求めて拾う子どもたちがいました。もう1つ私たちが心に残っている訪問先は、チエイ小学校です。この小学校には日本語教師の桧尾先生がいらっしゃいます。子供たちの瞳は、ここでも輝いています。カンボジアを訪問して感じることは、「日本は物がありすぎている」ということです。カンボジアの人は、貧しくてもとてもいい笑顔をくれます。あの笑顔はどこからくるのでしょうか。私にできるのでしょうか?これからも笑顔の源を捜すために、カンボジアから目が離せそうにありません。

※日本語教室やスタディツアーレポートはハート・オブ・ゴールドホームページに詳しく掲載されています。

## 東北地方で初めて

一カンボジア対人地雷被害者救済チャリティラン  
秋田県「01・おがちスポレクフェスティバル健康マラソン大会」の報告

平成12年初秋、私の出身地の秋田県雄勝町教育委員会から、町の活性化、住民の健康促進、青少年の健全育成等を目的としたスポーツイベント開催企画のお話がありました。平成13年10月頃「01・おがちスポレクフェスティバル」のメイン行事に、ピッグなゲストランナー参加の「健康マラソン大会」を行いたいとの相談でした。

ランニングをはじめて50数年の私が、高校卒業までお世話をなった故郷にほんの少しでもお役になればとの思いで参加することにしました。早速手持ちの健康マラソン大会関係の参考資料と



開催要項を立案しあ送りしました。送付した資料の中に千里マラソン大会で得ました「ハート・オブ・ゴールド」の資料とシンポジウムの写真を同封しました。町民一人ひとり

が、楽しく走って汗をかきながら国際協力を体験し、何かを感じてもらえばとの事で、教育委員会や町議会の会議で、全会一致で、有森選手をご招待しようとの決議になりました。

早速連絡しましたところ、快くご理解を頂き、ご協力頂くことになりました。有森選手が、東京国際女子マラソン大会に出場のため無理とのことで、高石ともや様のご参加承諾をいただきました。平成13年5月の連休を利用し、細部の打ち合わせのため雄勝町へいってきました。

「ハート・オブ・ゴールド」のロゴ入りTシャツと帽子を持参し、参加賞にしていただくことになりました。

10月20日（土）高石ともや様の歌とトークショー

21日（日）チャリティー健康マラソン大会

約1ヶ月間「ハート・オブ・ゴールド」チャリティーパネル展示会ともやご夫妻と私の3人で参加し、日頃は静かな雄勝町が大変な盛り上がりで、町民の皆さんに感動と感激を与えることができました。

有森代表はじめ高石ともや様や本部の田代様・サンケイスポーツ谷様のご理解とあ力添えによりまして、東北地方で最初の「ハート・オブ・ゴールド」ご支援のチャリティー健康マラソン大会が大変な評価を得ることができました。

皆様方に御礼申し上げご報告とさせていただきます。

（大阪府池田市 梶原輝雄）

## 有森さんが分校に来た

牧山分校は1年生から5年生までの11人が通っている岡山市唯一の分校です。6年生になると10キロ離れた牧石小学校に電車で通います。本校は有森裕子さんの出身校です。

分校では数年前から、学区内にある牧山クライインガルテンで行われる収穫祭に出店させてもらってPTA/バザーを行っています。昨年のバザーでは、有森さんがスポーツNGO「ハート・オブ・ゴールド」を設立されたことを知り、応援をしようと、活動パネルを事務局からお借りして展示し、募金箱をおきました。多くの方が協力してくださいました。

年が明け、保護者の2名が届けに行ってきました。そこで彼女とお話をしたのですが、分校までの距離や始業時間を聞かれた後、



しばらく考えられて「明日の朝、走ってお礼を言いにいきましょう。ただし予定にない思いつきなので大げさにしないでください。子どもたちにも内緒にして驚かせてやりましょう。ちょっと遅めのサンタさんということにしてください。」これは大変なことになりました。この夜、11軒の家には子どもたちに聞かれないよう翌朝少し早めに登校させようという連絡が回されました。

翌朝、とくに冷え込み霧の深い中、黄色のウェアに身を包んだ有森さんが牧山の道をかけ抜けて来られました。途中で子どもたちは追い抜かれたようです。8時前には、校長、教職員、保護者、近隣の方、近くの子どもたちの出迎えるなか分校に到着されました。子どもたちのつく10分あまりの間、10キロ以上走ったばかりとは思えないほどの表情で次々と記念写真やサインにこたえていただきました。8時半には出発しなければならないという短い間でしたが、カンボジアの子どもたちが地雷によって手足を失っていること、みんなの集めてくれた募金によって義足を買えること、勉強するための用具が買えること、野菜づくりの指導ができるなど丁寧にわかりやすく話してくださいました。今まで遠い国だったカンボジアが有森さんを通じて身近な国になりました。みんなはもうカンボジアの子どもたちとお友達だよといわれ、目を輝かせていました。

走ることによってこのように皆に感動を与えることができるまさにプロのランナーだと思います。走って帰られる姿を見送りながら、子どもたちは「速いなあ」「すごいなあ」を連発していました。大きな大きなプレゼントをありがとうございました。

（谷合裕子）

### 東日本支部便り

日本警察消防スポーツ連盟事務局長 志澤 公一

関東地方のチャリティーイベントには、会員やボランティアの方々の参加をいただきありがとうございます。さて、6月1ヶ月間、下記のような写真展が開催されます。1日でもお手伝いいただける方、ご連絡ください。また、写真展を見に足を運んでいただけましたらとお知らせいたします。この写真展を日本各地で開催したいと思いますので、希望の方は事務局までご連絡ください。

企画名 「グラウンドゼロ その中心の真実」

同時開催 日本人消防士が撮ったNY同時多発テロ事件現場写真展

「チャレンジライフ in カンボジア」

NPO／ハート・オブ・ゴールド活動写真展

日 時 2002年6月2日～2002年6月30日 1ヶ月間

場 所 東京テレポートセンター展望台（東棟）

展示物 〒135-8070 江東区青梅2-38 テレコムセンター

写真パネル70～80枚、使用資材数点、グラウンドゼロ（テロ事件現場）のコンクリート片、他

### 西日本支部便り

西尾 祥恵

1月19日（土）、大阪市長居障害者スポーツセンター（障害者スポーツを日本でいち早く取り入れた施設で設立して28年になる）にて、有森代表を迎えて、関西地区の会員交流会が開かれた。遠方から来てくださった方もおり、老若男女合わせて40名の会員が集まつた。スポーツセンターの高橋氏から障害者スポーツに関する話を聞かせていただき、センター内を案内していただきました。

普段障害者に接する機会のない方たちにはかなり心に残る研修であった。続く交流会では、昼食をとりながら自己紹介。今までに参加したマラソンやカンボジアに贈った車椅子、それぞれこの会に対する思いなどを語りながら、あちこちで人の輪が広がっていました。そんな和やかな時間はあつと言う間にすぎてしまったけれどこの日だけで終わりではなく、この日はほんの第一歩、これからが始まり。1人では出来なくても、この人たちとなら何か出来そう…そんな気持ちになれたら有意義な1日だった。